

トウガラシ属栽培種の種間交雑に関する研究 II

種間雑種 F_1 の諸形質*

廣瀬 忠彦・西 新也・高嶋 四郎

TADAHICO HIROSE, SHINYA NISHI, and SHIRO TAKASHIMA : Studies on the interspecies crossing in cultivated *Capsicum*. II. Characters of F_1 hybrids.

摘要 我国の乾果トウガラシの育種に資する目的でトウガラシ属の栽培種 *Capsicum annuum*, *C. frutescens*, *C. pendulum* および *C. sinense* の相互間種間交雫によって得られた雑種 F_1 について調査を行なつた。

F_1 では Heterosis が種々の程度に現われた。*C. annuum* の関与する組合せの F_1 は生育が良くなかつたが、他の F_1 は一般に生育旺盛で草丈や枝張り面積が両親の数倍に達するものもみられた。花冠の有色・有斑は白色・無斑に対し優性を示した。果色は両親の中間を示すものが多く、果実の脱離性は不脱離性に対し優性を示した。果実の含水量は高い側の親に近く、乾燥速度も遅い側の親に近かつた。

花粉稔性はかなり低く、0~50% の範囲にあつた。*C. sinense* と *C. frutescens* の F_1 はもつとも稔性が高く、*C. pendulum* と *C. sinense* の F_1 がこれに次ぎ、*C. frutescens* と *C. pendulum* の F_1 は交雫方向によって稔度に明らかな差がみられた。*C. annuum* についてみると、*C. pendulum* との F_1 は全く不稔で、*C. frutescens* との F_1 のみ可稔であつた。 F_1 花粉の不稔はそれぞれの種のゲノム構成の部分的な非相同に基づくものと考えられる。

交雫可能度および F_1 稔性の結果から我国の栽培トウガラシである *C. annuum* にもつとも近い種は *C. frutescens* と考えられ、この種のもつ優良形質を導入していくことが今後の方向といえよう。

I 緒論

本研究の目的は第1報³⁾において述べたごとく、近縁の栽培種のもつ優良な諸形質を我が国栽培品種に導入して辛味用トウガラシの新種を育成するにある。近縁種のもつ優良形質のうちとくに導入したいものは、強健性、耐暑性、Capsicin 含量の高いことならびに完熟果の脱離性等であるが、とりわけ脱離性は生産効率の節減に大いに役立つ有用な特性と考えられる。そこで前報ではまず 5 株間の交雫可能度を明らかにし、本報では F_1 の諸形質ならびに稔性を調べて、後代の有用性と育成の可否難易を論じ、実際育種を行なうための基礎を明らかにしようとした。*Capsicum* 属の種間交雫を行なつた成績は MILLER and FINEMAN⁵⁾, ODLAND and PORTER⁶⁾ および SMITH and HEISER^{8,9)} の研究もあるが、後代の調査を行なつた報告は極めて少なく、僅かに太田⁷⁾が *C. frutescens* × *C. annuum* の F_1 の観察を報じているのみである。

II 材料および方法

京都府立大学農学部蔬菜園芸学研究室

* 本研究の要旨は昭和36年園芸学会秋期大会にて発表

前報³⁾の交雫試験の結果得られた10組合せの F_1 について、1958年より1960年にわたつて調査を行なつた。これら F_1 の両親の組合せは第1表のごとくである。

毎年3月中旬温床内の川砂中に播種し、2回移植後5月中旬圃場に定植した。生育の困難なものまたは生育の遅い組合せでは鉢育苗によつた。圃場での管理は京都府の栽培規準に従つた。

本葉・花・果実の形態調査は、正常と認められるもの各30個について行ないその平均で表わした。本葉・草姿・花に関する調査は生育最盛期に行ない、果実に関する調査には完熟果を用いた。花粉稔性の調査は9月上旬に行なつた。1種につき10花、各花1000個以上の花粉を鏡検し、稔か不稔かの判定はコットンブルー染色法によつた。花粉不稔の原因をしらべるため、一部の F_1 について PMC 減数分裂時の染色体の行動をおしつぶし法によつて鏡検した。果実の辛味の測定は倍数稀釈法により、また果実乾燥試験は日乾法によつた。これらの詳細はすでに筆者等³⁾の報告に示すとおりである。

Table 1 Number of F_1 hybrids and the cross combinations.

No. of F_1	Combination of species	Combination of variety
801	<i>C. frutescens</i> × <i>C. annuum</i>	Tabasco × Takanotsueme
810	<i>C. annuum</i> × <i>C. pendulum</i>	Takanotsueme × Cristal
808	<i>C. pendulum</i> × <i>C. frutescens</i>	AC 1616 × Tabasco
811	"	Cristal × Tabasco
807	<i>C. frutescens</i> × <i>C. pendulum</i>	Tabasco × AC 1616
812	"	Tabasco × Cristal
817	<i>C. sinense</i> × <i>C. frutescens</i>	AC 1853 × Tabasco
818	<i>C. frutescens</i> × <i>C. sinense</i>	Tabasco × AC 1853
819	<i>C. sinense</i> × <i>C. pendulum</i>	AC 1853 × Cristal
820	<i>C. pendulum</i> × <i>C. sinense</i>	Cristal × AC 1853

III 結果および考察

A. 一般形質

(1) 葉の形質

各 F_1 の本葉に関する形質は第2表に示すごとくである。葉の大きさについて眞の Heterosis のあらわれた例はなく、808・811・817・819・820 の各組合せ F_1 では大型の方の親にはほぼ一致し、810・818 の各組合せでは中間の値となり、801・807・812 ではいずれの親よりも小さかつた。

(2) 草姿

各 F_1 の草姿に関する形質は第2表に示すごとくである。各 F_1 の生育は 801・807・812・819 を除いて一般に旺盛なものが多く、とくに 808・811・820 では極めて生長が盛んで Heterosis が大きく現われ、生育末期には1個体の枝張面積が 3m² を占める程になつた。この生長力の差は生育初期より明瞭にあらわれていた。草姿は大体両親の中間になるが草勢の強い

F_1 は幾分開き勝ちであつた。

(3) 花の形質

各 F_1 の花に関する形質は第3表に示すごとくである。一番花の開花は、801 のごとく両親のいづれよりもおぞいものもあるが、一般に早くなり 808・811・817・818・820 は両親のいづれよりも早くなつた。しかし開花の遅速は生育の遅速に由来するもので、初期生育の悪い 801・810・819 等では開花がおくれ、生長が早く Heterosis の強く現われる F_1 ほど開花も早くなる。1箇の着花数は、*C. sinense* を親とする組合せでは 1~2 で、他はすべて 1 であった。花弁の色をみると、*C. frutescens* および *C. sinense* の淡緑色は不完全優性に、*C. pendulum* の黄斑は完全優性にあらわれた。薬の色では *C. pendulum* の黄色が他の種に対し劣性に現われ、すべての F_1 が青紫色を呈した。

(4) 果実の形質

(イ) 一般形質

各 F_1 の果実に関する一般的な形質を示すと第4表

Table 2 Characters of leaf and growth habit in F_1 hybrids.

No. of F_1	Leaf			Growth habit	
	Average length cm.	Average width cm.	Plant height cm.	Branching	Growth strength
801	4.1	2.3	65.1	intermediate	intermediate
810	8.0	3.3	91.5	"	"
808	9.1	4.8	90.0	spreading	ext. vigorous
811	9.3	4.4	144.0	comp. spreading	"
807	6.7	2.4	64.0	spreading	intermediate
812	8.9	4.5	70.5	intermediate	"
817	10.0	4.9	98.0	"	vigorous
818	8.7	4.0	86.1	comp. spreading	"
819	9.9	4.4	64.7	"	intermediate
820	10.0	4.6	117.3	"	ext. vigorous

ext : extremely ; comp : comparatively

Table 3 Characters of flower of F_1 hybrids.

No. of F_1	Date of first flowering	No. of petals or stamens	Flowering habit	Colour of petals	Colour of anthers
801	Aug. 13	5~6	single	light green	purplish blue
810	July 25	"	"	{ white with yellow marking	"
808	June 23	"	"	} light green with yellow marking	"
811	June 11	"	"	} yellow marking	"
807	July 12	"	"	"	"
812	July 5	"	"	"	"
817	June 17	"	1 or 2	light green	"
818	June 29	"	"	"	"
819	July 20	"	"	{ white with yellow marking	"
820	June 18	"	"	} yellow marking	"

Table 4 Characters of fruit of F_1 hybrids.

F_1	Longi. dia. cm.	Trans. dia. cm.	Average weight gm.	Length of peduncle cm.	Fruit- position	Fruiting	Immature fruit colour
801	4.4	0.8	—	—	erect	non-prolific	light green
810	3.1	0.8	—	2.9	"	ext. non-prolific	"
808	3.5	0.9	0.36	3.4	"	intermediate	yellowish green
811	3.5	0.9	1.17	3.0	"	prolific	"
807	3.0	0.9	0.36	3.1	"	non-prolific	"
812	2.2	1.7	0.55	3.5	"	"	"
817	3.2	1.4	1.53	2.6	pendent	intermediate	light green
818	3.1	1.2	1.44	2.7	"	"	"
819	3.0	1.7	2.58	3.1	"	non-prolific	"
820	3.9	1.9	3.49	3.2	"	prolific	"

のごとくである。果実は 801 が両親よりやや大きいのを除くと一般に小さい。果形については *C. sinense* を親とする 817・818・819・820 と 801 では両親の中間にあるが、他の F_1 ではすべて短くなつた。しかしこれは配偶子不稔のため一果内種子数がきわめて少なくなり、その結果二次的に果実の発育が不良となつたも

のと考えられる。着果の方向は *C. sinense* との交雑を除き上向が完全または不完全に優性を示した。*C. annuum* の品種間交雫の場合では下向が完全または不完全優性を示す⁴⁾が種間雫種では反対の結果が得られた。着果数は一般に少ないものが多かつた。未熟果色はほぼ両親の中間に現われた。

Table 5 Characters concerning with the harvest and the quality of fruit in F_1 hybrids.

F_1	Mature fruit colour	Degree of pangency*	Water content %	Deciduous character of ripe fruit
801	orange red	2	73.1	deciduous
810	"	2	80.3	non-deciduous
808	orange	2	82.1	deciduous
811	orange red	2	80.5	"
807	orange	2	82.9	"
812	orange red	2	81.2	"
817	red	2	82.8	"
818	orange red	2	84.3	"
819	red	1	86.2	non-deciduous
820	"	2	86.1	"

* Pangency of Takanotsume (*C. annuum*)=1

(口) 実用的形質

果実に関する形質のうち商品価値および収穫能率に関係の深いものをまとめて示すと第5表のごとくである。完熟果色は未熟果色と同じくほぼ両親の中間にあらわれた。辛味の強さは819を除いて強い方の親にはほぼ等しくなり実用的に充分である。果実の脱離性は収穫作業の能率を著しく向上させることができるところのはなはだ有用な特性であるが、この形質は F_1 において完全優性として現われた。

Table 6 Pollen fertility and seed fertility in F_1 hybrids.

F_1	Pollen fertility %	No. of seed per fruit
801	38.1	7.4
810	0	2.0
808	21.2	4.0
811	21.1	5.5
807	0	2.0
812	0	1.0
817	51.8	13.0
818	36.7	11.4
819	25.7	1.6
820	37.6	2.6

果実の水分含量はいずれの F_1 においても両親のほぼ中間の値を示した。しかし製品の商品価値に大きい影響をもつのは水分含量よりもむしろ果実の乾燥の良否である。さきに筆者等²⁾は、近縁各種の果実は我国の経済品種である鷹の爪や本鷹の果実にくらべて乾燥

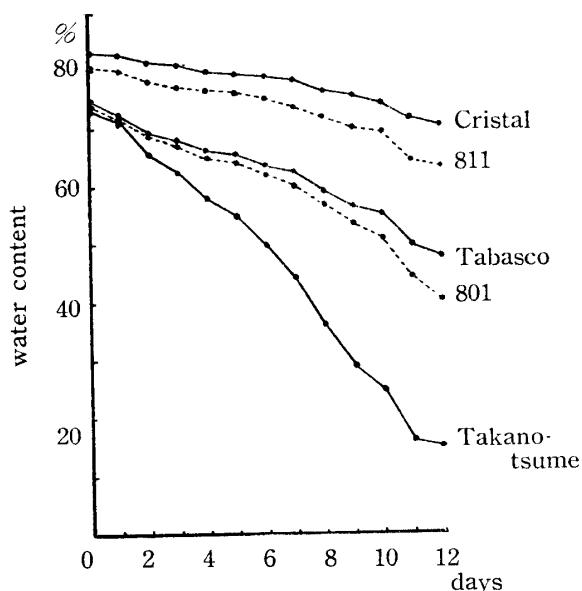


Fig. 1 Changes of water content of fruit after harvest (drying in the sun).

速度が非常におそくこれは果皮の解剖学的な相違に基づくものであることを述べた。そこでこれら F_1 の果実がそれらの両親と比較してどの様な乾燥過程をたどるかを 801・811 の 2 つの F_1 について調査した結果を示すと第1図のごとくである。いずれの F_1 についてもその水分含量の変化は乾燥のおそい側の親に近くなった。これは実用的な育種の目的からすればはなはだ重要な形質であり、今後の育種過程において重視して行かれねばならぬ形質である。

B. 稳 性

(1) 花粉の稔性および種子数

各 F_1 の花粉稔度および 1 果内稔種子数は第6表に示すごとくである。花粉稔度は 817 が最も高いが半分程度の花粉が不稔となつた。801・808・811・818・819・820 の F_1 では 20~40% の稔度を示し、810・807・812 では全部不稔となつた。両親が同じでも交雑の方向によって稔実率が異なり、とくに *C. frutescens* と *C. pendulum* の F_1 において明瞭な差がみられる。花粉稔性と種子数はほぼ比例的な関係がみられる。

(2) 染色体の行動

花粉不稔の原因を追究するため、全花粉が不稔となる 810 について花粉母細胞の成熟分裂の際ににおける染色体の行動を調べた。第2図Aは第1分裂中期のもので 9 個のⅡ価染色体と 6 個のⅠ価染色体がみられる。さらに第1分裂後期になると非接合染色体の一部は第2図Bのごとく遅滯染色体となる。

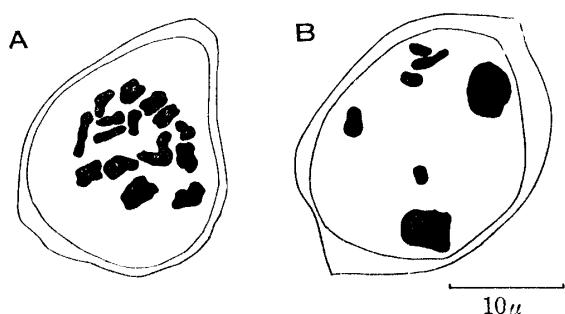


Fig. 2 Chromosome behavior at the meiosis in PMC of F_1 hybrid 810 (*C. annuum* \times *C. pendulum*). A. First-Metaphase showing 9 II+6 I, B. Five univalents lagging at first-Anaphase.

トウガラシ属栽培種の染色体数はいずれの種についても $n=12$ で従来から同一ゲノムによつて構成されるものと考えられていた^{1,3)}が、この観察の結果からすればこのゲノム構成は部分的に非相同であつて、その結果配偶子の不稔が起るものと思われる。各 F_1 における稔度の差はこの非相同的程度の差に基づくので

はないかと考えられるが、これを明らかにするには各 F_1 の配偶子形成の際の染色体の行動をさらにくわしく調べる必要がある。

C. 近縁関係の再検討

前報³⁾においては交雑可能度の結果から *Capsicum* 属 5 種の類縁関係を図示したが、 F_1 の生育および稔性調査の結果からみて、*C. pendulum*, *C. sinense* および *C. frutescens* の群のうち *C. annuum* と交雑し F_1 配偶子も可稔であるのは *C. frutescens* のみでこれがもつとも *C. annuum* に近いものと思われる。*C. pendulum* と *C. sinense* とはよく交雑し F_1 の稔性も比較的高い。これに対し、*C. frutescens* は *C. sinense* とはよく交雑し F_1 稔性も比較的高いが、*C. pendulum* との F_1 は稔性も比較的低く交雑方向によつても大きい差がみられる。

D. 種間交雑育種の方向

本研究の実用的な目的は我国の経済品種のすべてを含む *C. annuum* に他の種のもつ有用な形質を導入することにある。*C. annuum* は *C. sinense* および *C. pubescens* とは交雫せず *C. frutescens* および *C. pendulum* とのみ交雫可能であることが知られているが、 F_1 調査の結果 F_2 およびその後代を育成するためには、*C. pendulum* との交雫は F_1 の稔性が極めて低く、実際には *C. frutescens* との交雫のみが種間交雫育種を達成するための残された道ということができよう。しかし *C. frutescens* に属する品種には、導入したい形質すなわち果実の脱離性、高 Capsicin 含量、耐暑性等を示すものが多く、この点はなはだ好都合である。*C. annuum* を除く他の種相互間の雑種の後代からは上記の目的にかなう系統を選び出すことはほとんど考えられないが、これらの F_1 の示す Heterosis は他の目的に利用できるのではないかと考えられる。

引用文献

- 1) HEISER, C. B. Jr. and SMITH P. G. (1953) : The cultivated *Capsicum* peppers. Econ. Bot. 7 (3); 214~227.
- 2) 広瀬忠彦・浮田定利・高嶋四郎 (1957) : トウガラシの近縁種について。西京大学報農 9 号; 13~22.
- 3) ———・西 新也・——— (1960) : トウガラシ属栽培種の種間交雫に関する研究 I. 種間の交雫可能度について。京府大学報農 12 号; 40~46.
- 4) KAISER, SAMUEL (1935) : The inheritance of a geotropic response in *Capsicum* fruits. Bull. Torrey Bot. Club 62; 75~80.
- 5) MILLER, J. C. and Z. M. FINEMAN (1937) : A genetic study of some qualitative and quantitative characters of the genus *Capsicum*. Proc. Amer. Soc. Hort. Sci. 35; 544~550.
- 6) ODLAND, M. L. and A. M. PORTER (1938) : Inheritance of immature fruit color of peppers. Proc. Amer. Soc. Hort. Sci. 36; 647~651.
- 7) 太田泰雄 (1959) : トウガラシ種間雑種 *Capsicum frutescens* × *C. annuum* について。育種学会講演。
- 8) SMITH, P. G. and C. B. HEISER, Jr. (1951) : Taxonomic and genetic studies on the cultivated peppers, *Capsicum annuum* L. and *C. frutescens* L.. Amer. Jour. Bot. 38 (5); 362~368.
- 9) ——— and ——— (1957) : Breeding behavior of cultivated peppers. Proc. Amer. Soc. Hort. Sci. 70; 286~290.

Summary

The characteristics of ten species hybrids among four cultivated *Capsicum* species, *C. annuum*, *C. frutescens*, *C. pendulum* and *C. sinense*, were observed and described.

Heterosis were shown in all F_1 hybrids except the F_1 obtained from the interspecific crosses with *C. annuum*. Some of F_1 hybrids were so vigorous that they have grown up several times of their parents. Colored or yellow marked corolla was shown in dominance to white or no-marked. Mature fruit color of many F_1 hybrids was inter-

mediate of the parents, and the deciduous character of ripe fruit was shown in dominance to non-deciduous. Water content of mature fruit of them were higher than the intermediate, and the hardiness for drying was shown in dominance.

Pollen fertility varied from 0 to 51.8% in all F_1 hybrids. F_1 obtained from the crosses between *C. frutescens* and *C. sinense* were the most fertile, and the F_1 between *C. pendulum* and *C. sinense* is the next. In F_1 between *C. frutescens* and *C. pendulum* the percentage of

normal pollen differed reciprocally. Pollen of F_1 between *C. annuum* and *C. pendulum* were sterile entirely while that of F_1 between *C. annuum* and *C. frutescens* partially fertile (38.1%). Pollen sterility of these F_1 hybrid would be due to the partial heterogeneity of genome constitution in

the parent species.

From the results mentioned above, it may be considered that *C. frutescens* is the most related species to *C. annuum* so this species is the most important for the breeding of Japanese hot pepper varieties.

Explanation of Plate

Species hybrids F_1 among four cultivated *Capsicum*.

1. 801 (Tabasco \times Takanotsu)
2. 810 (Takanotsu \times Cristal)
3. 811 (Cristal \times Tabasco)
4. 812 (Tabasco \times Cristal)
5. 817 (AC 1853 \times Tabasco)
6. 818 (Tabasco \times AC 1853)
7. 819 (AC 1853 \times Cristal)
8. 820 (Cristal \times AC 1853)

PLATE I

